

A Study of "the Designs of the Noh Costumes
Owned by Kaga Domain MAEDA Family"
Illustrated by KANO Hogai (The collection at The
University Art Museum, Tokyo University of the
Arts) Examining questions regarding the Noh
costumes previously owned by the MAEDA family

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47325

狩野芳崖筆『加州家蔵能装束模様』 (東京藝術大学大学美術館所蔵)の調査結果について －前田家旧蔵能装束に関する考察－

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
石立(村上) 尚子

要旨

明治20年(1887)、東京本郷の前田侯爵邸にて、狩野芳崖らによって同家が所蔵する能装束の模写が行われた。現在、その模写は東京藝術大学大学美術館に卷子本(5巻、以下藝大本とする)として所蔵される。本稿では模写された50図を紹介するとともに、類似する前田育徳会本(9巻)との比較を行いながら、藝大本の資料的価値について述べる。特に、藝大本には模様だけでなく、能装束を包む畳紙に記された文字も転載されていることに着目し、現在所在不明ながらも仕立てた年代が判明する能装束の考察を行う。あわせて筆者がこれまで把握した、年代の判明する前田家旧蔵能装束の概観と今後の課題を提示する。

キーワード

加賀藩前田家、能装束、狩野芳崖

A Study of “the Designs of the Noh Costumes Owned by Kaga Domain MAEDA Family” Illustrated by KANO Hogai (The collection at The University Art Museum, Tokyo University of the Arts) Examining questions regarding the Noh costumes previously owned by the MAEDA family

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

ISHITATE (MURAKAMI) Naoko

Abstract

In Meiji 20 (in 1887), KANO Hogai and a few others gathered at the residence of Marquis MAEDA in Hongo, Tokyo, to illustrate the Noh costumes owned by the family. Currently, those illustrations are included in scrolls (5 volumes, hereinafter called Geidai scrolls). In this study, I introduce 50 illustrations, and describe the value of Geidai scrolls as a research material, while comparing the scrolls with similar MAEDA Ikutokukai scrolls (9 volumes). I will specifically focus on how the Geidai scrolls not only include designs of the costumes but also the letters written on the wrapping paper used to wrap the costumes, and

examine the illustrations for the costumes to determine details about the period in which they were created. The whereabouts of the costumes themselves currently are unknown. I will also present an overview of the knowledge I have gathered thus far with respect to Noh costumes previously owned by the MAEDA family, which reveal details about the period they were created in and will indicate the limitation of this study and scope for future research.

Keyword

Kaga domain MAEDA family, Noh costume, KANO Hogai

1. はじめに

明治20年（1887）の夏、近代日本を代表する日本画家・狩野芳崖（1828～88）は、東京本郷の前田侯爵邸にあった。開学を控えた東京美術学校の教材用に、文部省の図画取調掛雇として旧加賀藩主前田家が所有する能装束の意匠を記録するためである。4人の弟子（岡倉秋水・岡不崩・本多天城・高屋肖哲）を2人ずつ交代で手伝わせたが、その膨大な数を前に、「以後三ヶ年閲するとも尚ほ寫し終らぬ」と判断し、この夏のみで中止となった¹。

その記録は、現在『加州家蔵能装束模様』（5巻、藝大本）として、東京藝術大学大学美術館に残る。記録された模様は50図で、現在の所蔵者が明らかな装束もあれば、不明のものもある。筆者は、昨年度の本学プロジェクト研究経費により、これらの調査が可能となったため²、本稿にて藝大本の詳細を紹介するとともに、前田育徳会本（以下、育徳会本）との比較、現時点で確認できる前田家旧蔵能装束の概観と課題について述べておきたい。

2. 藝大本について

記録された模様の順序は定かではなく、それぞれ一枚のものであったが、後に東京美術学校において、卷子に仕立てられたとうかがえる。所蔵者による物品番号（ ）に従えば、法量は第1巻（878）縦29.0×652.8、第2巻（879）27.4×579.2、第3巻（880）29.1×467.2、第4巻（881）

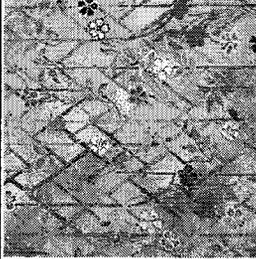
28.8×459.4、第5巻（882）30.8×638.2である³。

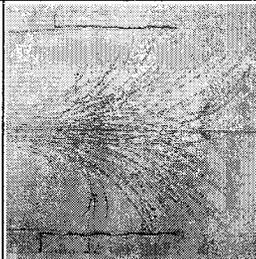
記録されたのは模様だけではない。装束を包む畳紙に記された番号や名称、模様に加え、年代が記されたものもある。畳紙にこのような装束に関する文字情報が附されることは非常に珍しく、染織研究史上注目されるばかりでなく、前田家旧蔵の能装束の特徴となっている⁴。つまり、藝大本に畳紙の文字も転載されていることは、未見の能装束や失われた畳紙に関する新たな情報をもたらしてくれるのである。特に、筆者が着目するのは記された年代にあるが、このことについては後述するものとし、はじめに全50図を【表1】として一覧する。

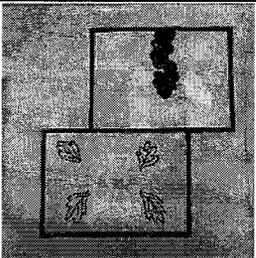
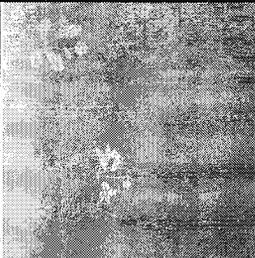
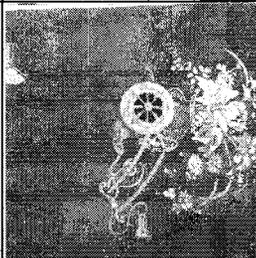
記録されたのは、唐織20領、舞衣13領、長絹17領の計50領である⁵。唐織は袖の部分を描いたものがほとんどだが、舞衣や長絹は背縫いを中心とした後身頃の模様を描いている。一般にいう能装束の種類とは、これら3つだけではない。小袖物には厚板・縫箔・摺箔、広袖物には水衣・狩衣・法被、袖の無い側次などもある。施される模様も様々で、例えば〈翁〉に用いられる翁狩衣には蜀江模様という舶載された裂に施される幾何学的な模様が、男性役が着用することが主な厚板には格子模様が多いなど、それぞれ役柄に応じた模様を持つ。唐織・舞衣・長絹の3つは、唐織は主に女性役、舞衣・長絹は美しく舞う役柄に用いられるが、模様として共通するのは、華やかなものが多いこと、特に、自然の景物を絵画的に捉えデザイン化されたもの、源氏物語など古典を題材とした

【表1】 狩野芳崖筆『加州家蔵能装束模様』(東京藝術大学大学美術館所蔵) 模様一覧

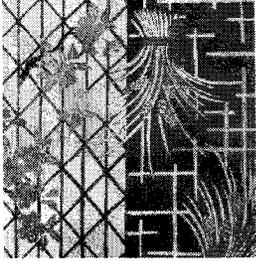
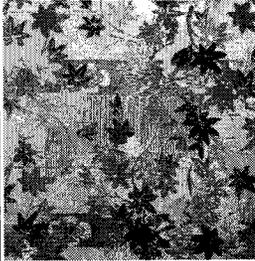
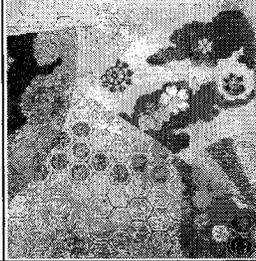
第1巻(878)

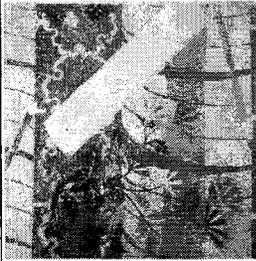
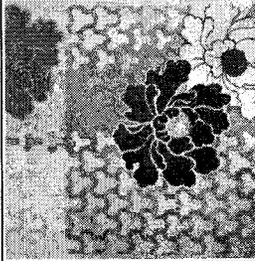
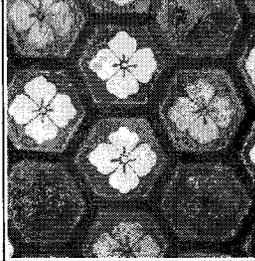
番号	[1]	[2]	[3]
模様写真			
記載内容	種類	唐織	唐織
	番号	式号	十一号
	地	色 地紅	地黒茶
	模様	金離崩シ花丸	金檜垣
	年代	文化八年	
その他	草紙洗など		
現在の所蔵者	成巽閣(前田育徳会寄託)		

[4]	[5]	[6]	[7]
			
舞衣	舞衣	長絹	長絹
十六号	八号	四十一号	四十九号
地紫	地紫	地紫	洞白
丁子立涌		腰模様 梶ノ葉	
弘化四年製	文化五年製	文化十五年製	嘉永二年製
	国立能楽堂	高島屋史料館	

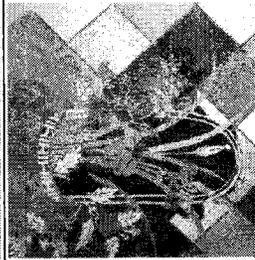
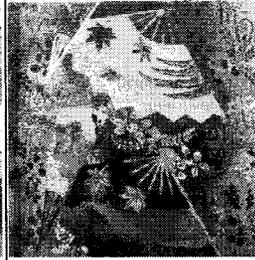
[8]	[9]	[10]	[11]
			
長絹	長絹	長絹	長絹
三十号	廿三号	三十号	五拾号
地白	地紫	地白	地紫
	文化七年		嘉永三年製
卒都婆鸚鵡小町之形二用ゆ	二人静二用ゆ	姥捨二用ゆ	
野村美術館	野村美術館		野村美術館

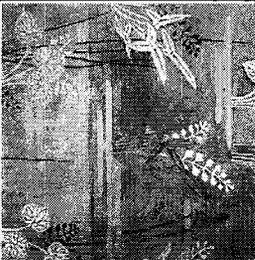
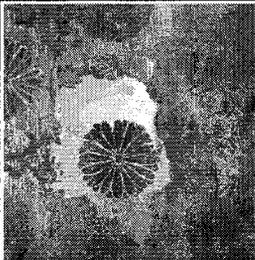
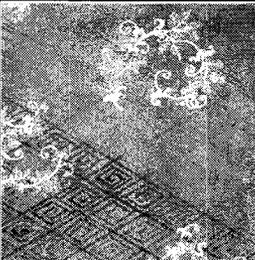
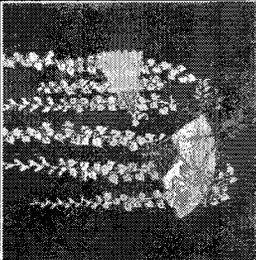
第2卷(879)

[12]	[13]	[14]	[15]
			
唐織	唐織	唐織	唐織
五十六号	五十号	三十一号	十号
金黒段替	白地	地白金雲	地亀甲色交金段替リ
船弁慶楊貴妃ニ用 天保十二年	簾ニ五色かえで	万延元年製	
	大原御幸ニ用左		前田育徳会

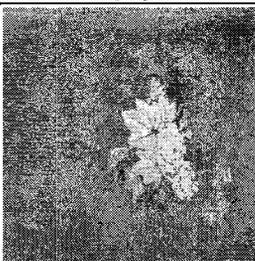
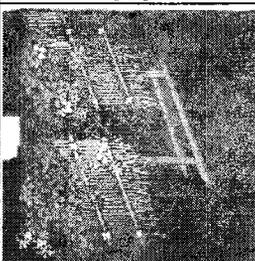
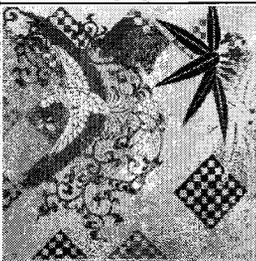
[16]	[17]	[18]	[19]
			
唐織	唐織	唐織	唐織
五十八号	十七号		五十五号
地紅	地紅淺黄地紋金銀		金竹
舟帆雪輪 弘化三年作			天保五年製
国立能楽堂		国立能楽堂	

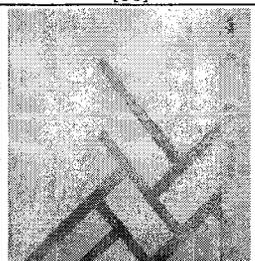
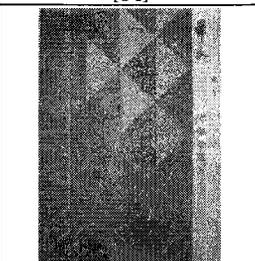
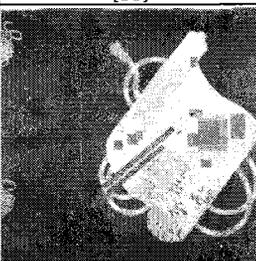
第3卷(880)

[20]	[21]	[22]	[23]
			
唐織	唐織	唐織	唐織
廿四号	廿号	五十三番	四十七号
色無地茶花色段替リ	地萌黄色ニ而石畳	地段替リ黒紅	色無地黒
文化五年新ニ出来		文政十三年製	文化十五年製
		金沢能楽美術館	

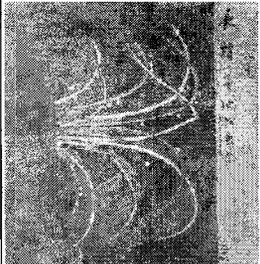
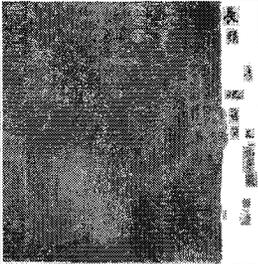
[24]	[25]	[26]	[27]
			
唐織	舞衣	舞衣	長絹
四十四号	七号	壹号	四号
色無地萌浅黄黄茶段替り	地萌黄	地稲妻菱空色	地紫
			同様紋袖
			松坂屋美術館

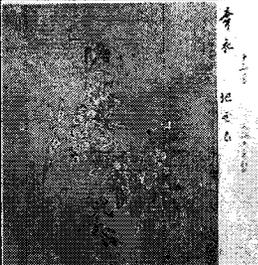
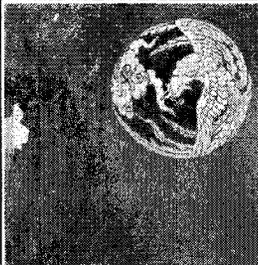
第4卷(881)

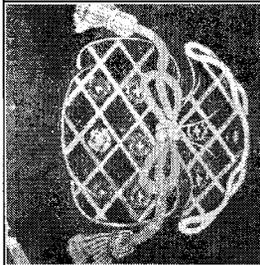
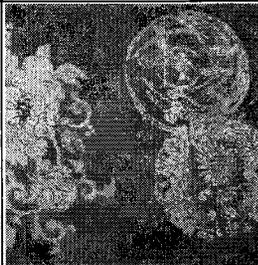
[28]	[29]	[30]	[31]
			
長絹	長絹	長絹	唐織
廿二号	五号	廿七号	九号
地紫	地洞萌黄	地紫	地紅金石疊五色一松 段替り
文化五年製	萬延元年製	文化八年製	
		同紋□□袖	
	野村美術館	野村美術館	

[32]	[33]	[34]	[35]
			
唐織	舞衣	舞衣	長絹
十六号	十二号	九号	四十七号
色無地茶	地白	地紅	地紫
	銀綾菱	金鱗形	
	文政四年製		弘化二年製
	堅横		同紋□□袖
野村美術館	野村美術館		野村美術館

第5巻(882)

[36]	[37]	[38]	[39]
			
長絹	長絹	長絹	唐織
八号	三十号	十二号	三号
色無地松葉色	地萌黄	地紫	地紅浅黄黒段替り
	文化九年製		
形之物定家 但し芭蕉に用		織出シ□シ字梅/鳥縫箔也	

[40]	[41]	[42]	[43]
			
唐織	舞衣	舞衣	舞衣
八号	十三号	三号	二号
地白金繪垣	地空色	地花色	地萌黄
	文政五年製		

[44]	[45]	[46]	[47]
			
舞衣	舞衣	舞衣	舞衣
十七号	地紅	地極白茶	五号
地花色			地紅
安政五年製	文政十三年製		
前田育徳会	野村美術館		

ものなど、いわば「日本的な」模様がほとんどである。明治政府が日本を近代化すべく、自国の美術文化創造の拠点とした東京美術学校誕生の背景を考えると、能装束の中でも「日本的な」模様が選ばれ、記録されていることは、興味深い⁶。

では、【表1】に従いながら、具体的にみていこう。

第1巻 (878) [1]～[11]

第1巻に記されたのは、唐織3点、舞衣2点、長絹6点の計11点である。

[1] 紅地に金糸で籬崩しの地模様を織り出した上に、丸紋が散らされた唐織。丸紋の中には撫子・牡丹・秋草といった草花や亀甲模様が見える。畳紙には「文化八年」「草紙洗など」と記されていたとわかる。本装束は現在成巽閣（前田育徳会より寄託）に所蔵されており、本図は左袖の後ろ側を描いたものである。畳紙も残されているが、草紙洗の記述のほか、「公達もの御着付」とも記される⁷。

[2] 黒地に金糸で檜垣の地模様を織り出し、全体に枝垂桜の模様を配した唐織。本装束の所在は不明だが、異なる地模様、同様の枝垂桜が配された紅地の唐織を、金沢能楽美術館が所蔵する⁸。先の [1] の能装束についても、地模様は異なるが、同様の丸紋が散らされた縫箔（白地丸紋草花模様 加賀市・江沼神社所蔵⁹）があることから、異なる地模様を持ちつつ同じ模様が施された能装束が、複数存在することがうかがえる。

[3] 茶地に鮮やかな空色で二重格子が施された地に、桐唐草と桜模様が散らされた色無の唐織である。

[4] 紫地に丁子を立涌のように配し、その間に唐花模様を置いた舞衣。現在は所在不明だが、昭和11年（1936）の売立目録（6月29日 東京美術倶楽部）に写真が載ることから、この時前田家より外に出たとわかる。

[5] 紫地に霞と鉄線が表された舞衣で、現在は国立能楽堂が所蔵する。記された「八号」「文化五年製」は、畳紙の記載に等しい。畳紙には「御稽古物」とも記される¹⁰。

[6] 紫地に秋草と梶の葉が金糸で施された長絹。現在は畳紙を伴わないまま、高島屋史料館が所蔵する。年代も不明と思われたが¹¹、藝大本に「文化十五年製」と記されることから、仕立てた年代が判明した。

[7] 白地に露芝模様を金糸で施した長絹。「洞白」とは白い絹地のこと¹²。「嘉永二年製」とある。

[8] 白地に二枚の色紙が段違いに配される。色紙の中には雲と牡丹模様、その下に紅葉が散らされている。現在は畳紙のない状態で、野村美術館が所蔵する。失われた畳紙には「卒都婆鸚鵡小町之形用ゆ」と記されていたことがわかる¹³。

[9] 紫地に花鬘斗と若菜模様が施された長絹。花鬘斗模様は下描きが透けて見えるだけで見づらいが、現在同装束は、野村美術館に伝わる。「文化七年」「二人静二用ゆ」とあるが、畳紙にもそう記される。なお前田育徳会には、同年に仕立てられ「二人静御用」と畳紙に記された摺箔（白地網に千鳥模様¹⁴）が伝わるが、本装束と共に用いられたのであろう。当然ながら、同じ長絹と摺箔がもう1領ずつ存在することになる。

[10] 白地に金糸で全体に霞を、その間に芒を配した長絹。「姥捨二用ゆ」と記される。

[11] は紫地に花車と蝶模様が金で表した長絹。野村美術館が所蔵する。「嘉永三年製」とあるが、畳紙にはその年の3月に「備後守様」より贈られたと記されている。備後守様とは、大聖寺藩12代利義（1833～55）のこと。加賀藩13代藩主前田斉泰（1811～84）の3男。

第2巻 (879) [12]～[21]

第2巻はすべて唐織、10点である。[12]については、後述する。

[13] 白地の御簾模様の上に、楓が散らされている。「大原御幸二用」いるとある。この図柄は、文政から天保期に田安德川家において能装束など能楽資料を模写した『獻英樓畫叢』（以下、『獻英樓』）にも掲載される。長崎巖氏によると『獻英樓』は、「現在は失われている作品や所蔵不明となっている作品」「存在そのものが知られていな

かった作品」も記録されており、能装束の研究においては、大きな意味を持つ資料と紹介されている¹⁵。『獻英樓』同図の横には「宝生大夫所持」と記されており、田安家では將軍家が好んだ宝生流に従うべく、後の「写し」制作の際の参考として、宝生流の能装束を模写し、その装束に関する情報を聞き書きしたと解されている¹⁶。同じく宝生流を好んだ前田家でも、同じ模様の能装束が存在したことは興味深い。

[14] こちらも『獻英樓』に記される。白地に金雲が施された地に、扇と団扇模様を散らした唐織。扇と団扇の中には、牡丹・菊・梅などの模様が見える。「万延元年製」とあることから、後述する[29]と同様、富山藩より譲られた装束のひとつか。

[15] 亀甲段替りの地模様に、開いた扇の模様が散らされる。扇の中には、雲に桜・桐・菊などが配される。こちらは現在も前田育徳会に伝わる代表的な能装束のひとつである。

[16] 紅地に船の帆・筆・文・藤袴・牡丹(深見草)・雪輪(縁雪)が描かれる。「弘化三年作」と記されるこの唐織は、現在国立能楽堂が所蔵する。弘化3年(1846)5月に、斉泰の有卦入りを祝って「御住居様」(偕=溶姫 1813~68)より贈られたものと、畳紙には記されている。この時催された能が〈伏見〉〈藤戸〉〈藤〉〈二人静〉〈富士太鼓〉〈船橋〉〈舟弁慶〉と「ふ」づくしで、装束の模様も「舟・縁雪・筆・文・藤袴・深見草・福寿草」と「ふ」づくしであったが、ここでは「地紅舟帆雪輪」と記されることから、もはやその意味は解されていないことがわかる。〈藤〉で用いられたか¹⁷。

[17] 紅と浅黄の地に金と銀で毘沙門亀甲模様を段替りで織り出し、牡丹を配した唐織。

[18] 花菱入りの亀甲模様が埋め尽くされた唐織で、国立能楽堂が所蔵する。藝大本には「唐織」との記載しかないが、畳紙には「文化十年閏十一月」とある。

[19] 紅地に金で竹模様を縦に配し、縞のように表現した地模様に、竹と梅を散らした唐織。「天

保五年製」と記載がある。現在は所在不明だが、『能衣裳模様』(芸艸堂 1963)に某家蔵として掲載されている。

[20] 段替りの地に、籬に葡萄、秋草が配される。「茶」「花色(紺色¹⁸)」と記されるが、花色の彩色はない。「文化五年新ニ出来」とある。

[21] 紅・金・紫・白などを多彩に用いて表された斜め石畳模様に、あやめなどの草花を納めた駕籠模様を配す。

第3巻(880) [22] ~ [30]

第3巻は唐織3点、舞衣2点、長絹4点の計9点である。

[22] 紅と黒の段替りの地に流水を配し、その上に萩と扇面を散らした唐織。「文政十三年製」と記され、現在は金沢能楽美術館が所蔵する。畳紙より「姫君様」(溶姫)より贈られた装束とわかる。

[23] 珍しい黒地の唐織。籬に花模様が配される。「文政十五年製」

[24] 萌浅黄と黄茶の段替り地に、沢瀉と立葵を配した唐織。

[25] 萌黄地に、金糸で菊模様が配された舞衣。

[26] 稲妻菱模様で埋められた空色の地に、金の唐草模様が散らされた舞衣。昭和11年の売目録に掲載されるが、現在は所在不明。

[27] 紫地に扇と藤の模様を持つ長絹。現在は松坂屋美術館が所蔵する^{19, 20}。

[28] 亀甲を全面に配した紫地に蝶が舞う長絹。「文化五年製」と記される。

[29] 萌黄地に芙蓉と紅葉を配した長絹。現在は野村美術館が所蔵する。「万延元年製」とあるが、畳紙にはあわせて「富山様より御譲の御分」と記されている。富山様とは、前年に没した富山藩10代前田利保(1800~1859)のこと。同じ年代を記す装束のほとんどにこの記述があることから、先の[14]もそのひとつと推測できる²¹。

[30] 地は紫。雲間に覗く月と舞う蝶、下には柴垣と鳥居を描く。源氏物語の「野宮」に取材した模様を施す。現在は野村美術館が所蔵し、昭和

11年の売立目録に載る。「文化八年製」

第4巻(881) [31]～[38]

第4巻は唐織2点、舞衣2点、長絹4点の計8点である。

巻頭に、垣根と広がる竹林を描くが、何を写したものは、不明²²。

[31] 紅・黄・紺・紫という多彩な斜め石畳の中に、更に細かく石畳模様を描いた地模様を持つ唐織。その上には竹葉と鳳凰に唐草を配す。

[32] 茶の地に藤棚を多彩に織り出したもの。畳紙は失われているが、昭和11年の売立目録に掲載され、現在は野村美術館が所蔵する。

[33] 白地に銀で綾菱を表した舞衣。「文政四年製」と記され、現在野村美術館が所蔵する。

[34] 紅地に金で鱗模様を表した舞衣。「鱗箔」とも呼ばれる鬼女用の装束。

[35] 紫地に巻物・筆・源氏車模様を表した長絹。「弘化二年製」と記され、現在野村美術館が所蔵する。畳紙より斉泰の生母・栄操院(1789～1850)より、斉泰の病氣(脚氣)回復を祝って贈られた装束とわかる²³。

[36] 松葉色に露芝模様が表された長絹。昭和11年の売立目録に載る。

[37] 萌黄地の長絹。模様の彩色はないが、藤と蒲公英が下書きされている。「文化九年製」と記される。

[38] 紫の地に梅とムクドリのような鳥が配される。現在は所在不明につき、実見は叶わないが、梅模様の上には赤い文字が織り出され、鳥も刺繍で表されていたことが、図の脇にある追記よりうかがえる。非常に珍しい長絹である。

第5巻(882) [39]～[50]

第5巻は唐織2点、舞衣7点、長絹3点の計12点である。

[39] 紅・浅黄・黒の段替りの地に、繁る秋草や水面に咲く杜若など草花を豊かに表した唐織。

[40] 白地に金で檜垣模様を表し、その上に竹・桐・唐草模様を散らした唐織。

[41] 空色の地に銀で桜を表した舞衣。「文政五年製」と記される。

[42] 花色の地に、丸紋で表した鳳凰と雲、その下に瑞雲を配した舞衣。

[43] 萌黄地に金で牡丹と扇を表した舞衣。大正14年(1925)の売立目録(5月25日 前田侯爵邸)に載る。

[44] 花色の地に、福袋・笛・ふり太鼓など「ふ」づくし模様の舞衣。現在は前田育徳会が所蔵する。「安政五年製」と記されるとおり、畳紙には同年の斉泰の有卦入りを祝い、妹である寿正院(勇 1813～75)より贈られたと記される。演能では〈右近〉〈元服曾我〉〈井筒〉〈鉢木〉〈飛雲〉〈松虫〉〈須磨源氏〉が催された。曲の頭文字を取ると「うけいわひます」、〈右近〉で用いられたか。

[45] 紅地に花をデザイン化した丸紋に、牡丹唐草を配す。現在は野村美術館が所蔵する。「文政十三年」に加賀藩12代藩主斉広(1782～1824)の室・真龍院(1787～1870)より斉泰へ贈られた舞衣。

[46] 白地に唐草模様を配した舞衣。

[47] 紅地に金で唐草と、花をデザイン化した丸紋を表した舞衣。

[48] 地は紫。違筋の垣根に茂る鉄線を表した長絹。「文化十一年製」と記す。現在は畳紙を失ったまま金沢能楽美術館が所蔵する。

[49] 黄茶地に扇と山帰来を配した長絹。「卒都婆小町之類二用」と記す。現在は野村美術館が所蔵する。

[50] 紫地に波に浮かぶ船の帆を表した長絹。「文化十三年製」と記される。

以上50図のうち、現在もその所蔵者が明らかなのは管見の限り20領に過ぎない(【表1】現在の所蔵者の項)。いったい藩政期に、前田家はどのくらいの装束を持っていたのかについては、よく聞かれることだが、当時の台帳も見つからないため正確な数はわからない。ただ、売立目録より大正・昭和期に売られた装束は440点以上確認できることから²⁴、少なくともそれ以上は有していた

のである。芳崖が「三年かけても終わらない」と述べたのも納得できる。

3. 記される年代

先にも触れたように、藝大本について特筆すべきは、模様だけでなく、畳紙に記された文字も転載されていることである。筆者はこれまで畳紙に記された年月日に着目し、この時、加賀藩でどのような能が催されていたかを照らし合わせることで、畳紙に納められた能装束がどのような曲に用いられたか、どのような演能が行われたかを考察してきたが²⁵、今回、藝大本の調査により、その記載より仕立てられた年代が推測できる装束を新たに複数確認できた。

年代が記された能装束は、半数にあたる25点(【表2】藝大本の項、ただし[18]を除く)。この割合は、調査済みの能装束の4~5割の畳紙に年代が記されることとも似る。年代の幅も文化5年(1808)から万延元年(1860)と、筆者が指摘する「文化5年から文久元年(1861)まで」の範囲内である。仕立てられた年代が判明する装束は、12代藩主斉広・13代藩主斉泰の時代のものと考えてよいであろう。

25点のうち、13点は今回新たに年代が判明した能装束である(【表2】藝大本の項・網掛け)。昭和11年の売立目録に載る舞衣[4]や、『能衣裳文様』に掲載された唐織[19]のように、現在は所在不明ながらも、新たに11点の年代が判明する能装束を確認できたほか、畳紙のない高島屋史料館所蔵の長絹[6]と金沢能楽美術館所蔵の長絹[48]については、仕立てた年代を明らかにできた。

こうした結果、現在のところ、年代が明らかな能装束は147点を数えるに至り、それを年代別にグラフ化したのが【図】、具体的な能装束の名称等を記したのが【表2】である。筆者は能装束が仕立てられる年や数について、大規模な演能に合わせて装束が仕立てられたり、藩主の慶事に合わせて装束が贈られたりするなど、演能回数や藩情勢と連動すると考えているため²⁶、今回のような

調査を経て、仕立てられた年代が明らかな装束が増えることは、その裏づけの補強にもつながる。

4. 「天保十二年」「金黒段替」「船弁慶楊貴妃二用」の唐織[12]を例に

では、現在は所在不明だが、かつて前田家にあったひとつの唐織を例に、藝大本に記された文字より判明すること-どのような能装束であったか、どのように用いられたか-について、推測を試みたい。

「金黒段替」と記される。段替(段替り)とは、装束の地を大きく格子のように区分(背であれば8区分)するもので、江戸中期以降によく登場する模様である。本装束の地色は黒・金・白で、地模様として籠目・二重菱・格子が施されている。

その上には、桜の折枝と結び稲の模様が、装束全体に散らされている。桜の花びらは紅と桃色が、稲を結ぶ紐も紅が使われ、実る穂は紅・緑・紺・金を用いてデザイン化されている。春と秋を象徴する桜と稲穂を、黒と金地の上に配した、舞台映えする装束であったとうかがえる。

畳紙には「船弁慶楊貴妃二用ユ」と記されていたようだ。このように納められる装束にふさわしい能が、畳紙にはしばしば明記されている。本装束の助言者は不明だが、他の装束の畳紙には「申聞候事弥三郎」「弥五郎申上」などの名²⁷が見え、これらは主に能役者からの助言と推測できる。助言に従い『加賀藩史料²⁸』より演能記録をみると、〈船弁慶〉は文政10年(1827)2月26日、天保11年12月22日をはじめ、弘化2年2月18日、3年5月19日、安政3年(1856)10月21日に斉泰をシテとして演じられた一方、〈楊貴妃〉が演じられたのは、天保13年4月27日のみである。天保12年に仕立てられた装束を、弘化2年まで使用を待ったとは考えにくく、本装束は翌年の〈楊貴妃〉で用いられたと推測したい。

斉泰は実に多彩な曲を好んで演じたようである。天保年間あまり演能が催されず、仕立てられた能装束も少ないと考えているが、天保5年に

【表2】 仕立てた年代が判明する能装束一覧

和暦	西暦	月(日)	能装束の模様	種類	畳紙のみ	所蔵者	藝大本
文化5	1808	12月	「御地花色」	熨斗目	○	彦根城博物館	
			薄紅地鱗雲龍丸模様	厚板唐織		国立能楽堂	
			浅黄地黄格子模様	厚板		野村美術館	
			白地金銀雲繫模様	摺箔		松坂屋美術館	
			紫地霞鉄線模様	舞衣		国立能楽堂	[5]
			萌黄地雨龍模様	半切		彦根城博物館	
		「色無地茶花色段替」	唐織		-	[20]	
		「地紫」(亀甲に蝶)	長絹		-	[28]	
文化6	1809	3月	「紅地唐華立杵ニ花ノ丸」	舞衣	○	彦根城博物館	
		5月	浅黄	大口		高島屋史料館	
		8月	紫紵地金唐草飛模様	摺箔		松坂屋美術館	
		8月	「かき色鶴菱模様御紋亀」	掛直垂	○	彦根城博物館	
		9月	浅黄地桐菊唐草模様	水衣		野村美術館	
		10月	白地青海波に龍丸模様	法被		前熊コレクション ※1	
文化7	1810	11月	白地雲輪宝模様金襴	半切		高島屋史料館	
		4月	茶地黄紺白萌黄金重菊模様	唐織		石川県立美術館	
		7月	紫地格子に丸龍入り模様	半切		彦根城博物館	
		10月	紫地立涌に桜折枝模様	単狩衣		彦根城博物館	
		10月	萌黄地檜垣に唐花模様	法被		前熊コレクション	
		11月	白地露芝模様刺繍箔	水衣		野村美術館	
文化8	1811	12月	縫漬唐花蜀江模様	厚板唐織		国立能楽堂	
			白地網に千鳥模様	摺箔		前田育徳会	
			紫地金柳熨斗蒲公英模様	長絹		野村美術館	[9]
		正月	紫地金地枝垂柳水模様	長絹		野村美術館	
		閏2月	紅萌黄黒紅段杜若八橋模様	唐織		国立能楽堂	
		閏2月	白地青海波菊折枝模様	摺箔		松坂屋美術館	
		閏2月	紫地野々宮模様	長絹		野村美術館	[30]
		閏2月	紫白地大縞模様	水衣		野村美術館	
		閏2月	萌黄地十字模様	水衣		彦根城博物館	
		閏2月	白地九曜紋入蜀江模様蜀金	袷狩衣		高島屋史料館	
閏2月	紫地大亀甲雲霧三鈿模様	法被		野村美術館			
文化9	1812	10月	白紫横縞段霞桜花桐唐草模様	摺箔		松坂屋美術館	
			紅金地籬崩し花丸模様	唐織		成巽閣	[1]
			白練織地葛模様	厚板		根津美術館 ※2	
		2月	「大格子」	厚板	○	彦根城博物館	
		4月	桃色地山道模様	摺箔		石川県立美術館	
		5月	納戸地紗楽器模様	法被		野村美術館	
		12月	萌黄地藤花草模様	長絹		野村美術館	
		12月	紫地花雲模様箔	大口		野村美術館	
			白綾着附水仙丸模様	厚板		根津美術館	
			納戸地波三ツ鱗両龍模様	摺箔		野村美術館	
			紫地秋草熨斗芭蕉丸模様	長絹		野村美術館	
			紺地雲唐松模様	袷狩衣		彦根城博物館	
			紺地花菱亀甲模様金襴	側次		高島屋史料館	
			白地七宝模様	大口		野村美術館	
	白地立波紅葉模様	大口		野村美術館			
	萌黄地唐花七宝つなぎ模様	袷法被		前熊コレクション			
	「地萌黄」(藤に蒲公英)	長絹		-	[37]		
文化10	1813	正月	緋色地	大口		鏡仙会 ※3	
		3月	茶地縞模様	水衣		彦根城博物館	
		3月	紺地山道唐花模様金襴	袷法被		高島屋史料館	
		4月	茶地立涌に亀甲と寿字丸模様	単狩衣		彦根城博物館	
		5月	萌黄地毘沙門亀甲模様	長絹		野村美術館	
		6月	白地花入亀甲繫唐草扇散模様	摺箔		松坂屋美術館	
		6月	白地唐草扇面散模様	摺箔		松坂屋美術館	
		閏11月	紅地花菱亀甲繫模様	唐織		国立能楽堂	[18] ※4
		藍媚茶地雪持水仙模様	唐織		畠山記念館 ※5		

文化10	1813		赤地雲唐草模様	半切	野村美術館	
文化11	1814	正月	紺地唐花入二重松皮菱模様	袷法被	前熊コレクション	
		5月	紫地麻の葉繫に松唐草模様	狩衣	彦根城博物館	
		6月	茶地無地寄	狩衣	野村美術館	
文化12	1815		紅地金雲雪持棒模様	唐織	島山記念館	
			紫地籬に鉄線模様	長絹	金沢能楽美術館	[48]
文化13	1816	3月	白地檜垣唐花模様	袷法被	高島屋史料館	
		8月	白地金銀唐花に蝶模様	縫箔	前田育徳会	
文化15	1818	11月	唐織唐草紫地金龍萌黄地唐花模様	側次	石川県立美術館	
			「地紗色紫」(波に帆船)	長絹	-	[50]
文化15	1818		紫地大紋秋草裾霞に槐の葉模様	長絹	高島屋史料館	[6]
			「色無地黒」	唐織	-	[23]
文政3	1820	9月	紅地無文	大口	彦根城博物館	
		10月28日	萌黄無地寄	狩衣	野村美術館	
文政4	1821	2月	白地銀檜垣模様	舞衣	野村美術館	[33]
文政5	1822		「地空色」	舞衣	-	[41]
文政6	1823		水色紕地銀菊唐草模様	摺箔	松坂屋美術館	
			茶白江戸段	熨斗目	前熊コレクション	
文政7	1824		薄浅黄地鉄線模様	袷狩衣	前熊コレクション	
天保元	1830		紅黒紅段流水萩に扇散模様	唐織	金沢能楽美術館	[22]
			赤地花丸紋牡丹模様	舞衣	野村美術館	[45]
天保3	1832	2月	白地紅斑掛立涌模様	摺箔	国立能楽堂	
天保5	1834	3月22日	白茶地段替竜甲唐花格子模様	厚板	松坂屋美術館	
			紫地開扇に藤模様	長絹	鏡仙会	
			紫地色糸霞模様	長絹	鏡仙会	
天保6	1835		「地紅」「金竹」(赤地梅竹模様)	唐織	-	[19]
		2月	「白地綾杉丸籠」	法被	○彦根城博物館	
天保11	1840	正月	紺地花菱亀甲繫ぎに飛鶴模様	袷狩衣	彦根城博物館	
		6月	赤地鳳凰桐模様	長絹	野村美術館	
天保12	1841		「金黒段替」	唐織	-	[12]
天保14	1843	11月26日	茶地斜め竹格子鳳凰丸桐菊寿字模様	翁狩衣	彦根城博物館	
天保15	1844		「御地黒紅桜色束錦小紋」	素襖	○彦根城博物館	
弘化2	1845	2月4日	白地黒斑掛波に帆船模様	摺箔	鏡仙会	
			白地源氏散模様	摺箔	松坂屋美術館	
			紫地巻物筆源氏車模様	長絹	野村美術館	[35]
		2月	紺地竹立涌松竹梅丸模様金襴	袷狩衣	高島屋史料館	
			茶浅黄地段替菱桐丸模様	厚板	野村美術館	
弘化3	1846	5月	水浅黄綸子地鱗模様	摺箔	根津美術館	
			「萌黄紋紗蘆雁地紋」「松葉色」	水衣	○彦根城博物館	
			紅地有卦船模様	唐織	国立能楽堂	[16]
			綸子地ふくら雀模様	摺箔	鏡仙会	
			紫地白富士金霞二葉模様	長絹	野村美術館	
弘化4	1847	3月	紺地金竹模様	半切	鏡仙会	
			黒地四季草花の熨斗札散らし模様に鶴亀紋	掛直垂	彦根城博物館	
			「兼保染枝笹」	掛直垂	○彦根城博物館	
			銀地唐花模様	唐織	石川県立美術館	
			「御地白段紗」	水衣	○彦根城博物館	
嘉永元	1848	11月	「御地葉村懸浅黄蝶之模様」	掛素襖	○彦根城博物館	
			萌黄地横縞模様	水衣	野村美術館	
			「丁子立涌」	舞衣	-	[4]
			茶地花鳥亀甲佐々模様	厚板	野村美術館	
			黄地唐花模様綴錦	半切	京都国立博物館	
嘉永2	1849	7月	浅黄地切金模様	掛直垂	彦根城博物館	
			「洞白」	長絹	-	[7]
嘉永3	1850	正月	「白萌黄格子三段」	熨斗目	○彦根城博物館	
		3月21日	黒地茶三重格子厚板	厚板	前田育徳会	
		3月	紫地花車模様長絹	長絹	野村美術館	[11]
		4月	白地丁字立涌に霞模様	単狩衣	彦根城博物館	
嘉永4	1851	5月	「藤花色」	水衣	○彦根城博物館	
		6月	白地小模様琉球綸子	厚板	個人	
嘉永5	1852	8月5日	白地紫納戸色	水衣	野村美術館	
		4月6日	縹子地金運雲からす模様	摺箔	前田育徳会	

嘉永5	1852	10月	白地紅斑掛なげ桐模様	摺箔	国立能楽堂		
			色無金入蜀江形大丸紋	唐織	前田育徳会		
嘉永6	1853		色無蜀江形丸紋	厚板唐織	前田育徳会		
			水色地雲龍模様赤地銀鱗模様摺箔下着付	縫箔	石川県立美術館		
安政元	1854		白地樺色石畳文に亀甲宝尽模様	厚板	前田育徳会		
安政3	1856		白地茶萌黄小格子	厚板	石川県立美術館		
			「御地黒」	素襖	○彦根城博物館		
安政4	1857	9月	白縹子地富田雲模様	摺箔	根津美術館		
			白地小模様	法被	野村美術館		
安政5	1858		紅地白鷺太蘭模様	縫箔	国立能楽堂		
			花色地福包二つ辰笛振太鼓模様	舞衣	前田育徳会	[44]	
			緑雪二葉葵模様	掛素襖	高島屋史料館 ※6		
			「白練御着附」	厚板	○彦根城博物館		
安政6	1859	8月	紺丸龍蜻蛉地模様	厚板	野村美術館		
			10月	白茶地小格子模様真田絹	厚板	上田市立博物館 ※7	
			11月	樺色地破れ亀甲に八十五の丸文字模様	掛素襖	彦根城博物館	
			12月	黒地丸紋尽	縫箔	石川県立美術館	
万延元	1860	8月	紫地牡丹折枝に蝶模様	長絹	前田育徳会		
			萌黄地紅芙蓉模様	長絹	野村美術館	[29]	
			萌黄地玉虫藤金糸龍模様	長絹	野村美術館		
			濃茶地金椿莖模様	長絹	野村美術館		
			萌黄地金霞模様	水衣	野村美術館		
			萌黄地縞大格子模様	水衣	野村美術館		
			黒絹地唐松模様	単狩衣	野村美術館		
		「地白金雲」	唐織		[14]		
文久元	1861	12月	紅地無文	指貫	彦根城博物館		
			白紋紬地銀七宝くづし模様	摺箔	松坂屋美術館		
			白紋紬地金銀唐草段模様	摺箔	松坂屋美術館		

※1 筆者未見。『前熊コレクション 能面と能装束』（金沢能楽美術館 2011）

※2 筆者未見。田中淑江氏の調査による（注32に同じ）。

※3 2016年7月26日、同年度本学プロジェクト経費により調査（注20も同じ）。

※4 年代の記載は、畳紙にあるが、藝大本にはない。

※5 筆者未見。同館ホームページによる。

※6 畳紙は彦根城博物館にあり。

※7 筆者未見。門脇幸恵氏のご教示による。

宝生友子より出された免状²⁹には、鬘物から執心物、鬼女物、物狂能まで様々な曲名が記されている。藝大本に記録されたのは、唐織・長絹・舞衣だけだが、現在前田育徳会には厚板・摺箔・縫箔といった能装束も、あらゆる種類の能面も伝えられている。これらは藩主が様々な曲を好み、演じようとした証といえよう。

5. 育徳会本との比較

ところで、藝大本を調査しながら、前田育徳会に所蔵される同じように能装束の模様を記録した卷子と、一部についてまったく同じであることに気が付いた。育徳会本³⁰については、これまで江戸時代後期に高田嘉平なる人物によって描かれたもの、と紹介されているだけである³¹。新たにな

にがわかるだろうか。

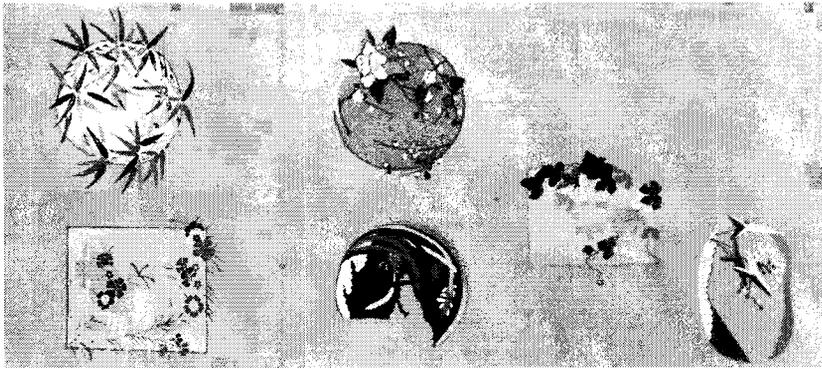
育徳会本は9巻から成り、うち5巻（巻1～5）については縦30.0、残り4巻（巻6～9）が縦約27.0で、この前者5巻（1-41-1～5）に描かれる模様が、順序は違えど藝大本の50図に一致する。このことを示したのが【表3】の対比表である。藝大本の中に、装束の模様とは思えない図様がか所描かれていたのだが（藝大本 [30] と [31] の間）、同じ図様が育徳会本（1-41-5 0）にもあったことから、この一致に気がついた。しかしながら、育徳会本には畳紙の文字は記されていない。つまり、育徳会本のうち藝大本と同じ5巻については、畳紙に納められた能装束を直接見て描いたのではなく、藝大本と同時期、あるいは藝大本を元に模様を描き写したものと推定する。藝大本と育徳会本では載せる図柄の順序も異なるため、恐

【表3】 育徳会本と藝大本の比較

	育徳会本		藝大本
	番号		
卷1	1-41-1	1	[12]
	1-41-1	2	[13]
	1-41-1	3	[14]
	1-41-1	4	[1]
	1-41-1	5	[2]
	1-41-1	6	[5]
	1-41-1	7	[6]
	1-41-1	8	[37]
	1-41-1	9	[38]
	1-41-1	10	[3]
	1-41-1	11	[4]
	1-41-1	12	[11]
卷2	1-41-2	1	[39]
	1-41-2	2	[40]
	1-41-2	3	[48]
	1-41-2	4	[49]
	1-41-2	5	[50]
	1-41-2	6	[43]
	1-41-2	7	[44]
	1-41-2	8	[45]
	1-41-2	9	[46]
	1-41-2	10	[47]
	1-41-2	11	[41]
	1-41-2	12	[42]
卷3	1-41-3	1	[22]
	1-41-3	2	[23]
	1-41-3	3	[30]
	1-41-3	4	[24]
	1-41-3	5	[26]
	1-41-3	6	[25]
	1-41-3	7	[27]
	1-41-3	8	[28]
	1-41-3	9	[29]
卷4	1-41-4	1	[17]
	1-41-4	2	[18]
	1-41-4	3	[19]
	1-41-4	4	[15]
	1-41-4	5	[16]
	1-41-4	6	[20]
	1-41-4	7	[21]
卷5	1-41-5	0	
	1-41-5	1	[31]
	1-41-5	2	[32]
	1-41-5	3	[33]
	1-41-5	4	[34]
	1-41-5	5	[35]
	1-41-5	6	[36]
	1-41-5	7	[9]
	1-41-5	8	[10]
	1-41-5	9	[7]
1-41-5	10	[8]	

【表4】 育徳会本(巻6~9)の模様一覧

	育徳会本		模様	現在の所蔵者	その他
	番号				
卷6	1-41-6	1	扇3面(竹・松・梅)		
	1-41-6	2	紫陽花丸紋と楓丸紋		下描
	1-41-6	3	扇2面(杜若など)		
	1-41-6	4	白地御簾に牡丹折枝	国立能楽堂	縫箔
	1-41-6	5	萌黄地花丸型紙文【写真1】	石川県立美術館【写真3】	縫箔
	1-41-6	6	紅地に鳳凰	野村美術館	長絹 昭11目録掲載
	1-41-6	7	白鼠段秋草	金沢能楽美術館	縫箔
	1-41-6	8	八角に牡丹		
	1-41-6	9	楓		下描
	1-41-6	10	亀甲に扇唐草		下描
	1-41-6	11	袖模様4種(藤丸紋・扇に杜若・牡丹など)		
	1-41-6	12	斜め格子唐花		
	1-41-6	13	袖模様2種(藤丸文・扇に杜若)		下描
卷7	1-41-7	1	扇面と団扇に草花		
	1-41-7	2	双鳥丸紋		
	1-41-7	3	茶地亀甲に唐草	前田育徳会	狩衣
	1-41-7	4	茶地蜀江文		
	1-41-7	5	団扇に草花		
	1-41-7	6	扇と型紙模様【写真2】	石川県立美術館【写真3】	
	1-41-7	7	萌黄地扇と丸紋		
	1-41-7	8	茶地三つ葵		
	1-41-7	9	紅地金霞に桜		
	1-41-7	10	紅地流水に鴛鴦		
	1-41-7	11	黄地雲に双鳥	国立能楽堂	縫箔
	1-41-7	12	紺地流水金雲に紅葉		
	1-41-7	13	白地撫子	松坂屋美術館	縫箔
	1-41-7	14	斜め格子に桜牡丹菊		
卷8	1-41-8	1	格子に唐草		
	1-41-8	2	萌黄地に花菱		
	1-41-8	3	格子		
	1-41-8	4	亀甲に波		
	1-41-8	5	秋草		
	1-41-8	6	紫地七宝模様に若松		縫箔 大14目録掲載
	1-41-8	7	亀甲に巴と雲		
	1-41-8	8	二重菱に唐花	松坂屋美術館	厚板唐織
	1-41-8	9	檜垣に菱		
	1-41-8	10	袖模様3種(唐草・紅葉など)		
卷9	1-41-9	1	つつじに蒲公英		下描
	1-41-9	2	扇		
	1-41-9	3	撫子など		
	1-41-9	4	紅地紫陽花と菊		
	1-41-9	5	菊・紅葉・蝶に秋草		
	1-41-9	6	藤菊梅丸紋		
	1-41-9	7	扇模様2種		



【写真1】育徳会本 巻6 (部分)



【写真2】育徳会本 巻7 (部分)

らく、芳崖らが描き写した一枚物が、まだ卷子に仕立てられる前に描き写されたのではないか。育徳会本の筆者とする高田嘉平については不明であるが、育徳会本は藝大本に同じく明治期に描かれたものに相違ない。少なくとも、幕末にあたる万延元年（1860）に「富山様」より譲られたという装束の模様も描かれていることから、これまでの解説に附された江戸後期というよりも、明治以降に描かれたとするのが適切であろう。

残り4巻（巻6～9 1-41-6～9）についても触れておく【表4】。こちらは能装束の模様だけでなく、扇の模様なども描かれる。装束については、袖などの全体が描かれるというよりも、模様的一部分を抽出して描かれることが多く、明らかに先の5巻と描き方は異なる。そして、描き手は複数と考える。

先の巻1から巻5に重複する模様はないが、巻6から巻9には重複する図柄が見つかる。例え



【写真3】鶉茶地型紙花紋散縫箔 石川県立美術館所蔵

ば、巻6の第5図【写真1】と巻7の第6図【写真2】は、現在石川県立美術館が所蔵する縫箔【写真3】の模様を描いたものだが、描き方が異なる。

同じく、巻6の第8図と巻7の第4図も、同じ模様の装束を描いたものである。従って、育徳会本は能装束の模様を一人で記録したものではなく、恐らく複数人で描いたものであろう。ここで思い出されるのは、冒頭にも触れた『狩野芳崖傳』の「秋水、不崩及び天城、肖哲を二人宛交代に引連れられ、毎日本郷の前田侯爵家へ行かれ」の記載である。育徳会本には文字情報は伴わないので、これ以上の推測は不可能だが、藝大本との関わりが深いことを提示しておきたい。

6. 前田家旧蔵能装束をめぐる今後の課題

近年前田家旧蔵能装束の調査が相次ぎ³²、筆者が確認した能装束ものべ300点以上を数えた。この先も実見する機会は増えていくだろうが、最後に今後の課題について考えてみたい。

先にも述べたが、確認される能装束が示す年代は「文化5年～文久元年」、すなわち12代藩主斉広、13代藩主斉泰の時代に概ね収まるだろうが、最近の調査では明治期に仕立てられたと思われる能装束も散見するに至っている。例えば、畳紙に「明治十二年一月出来」と記され、馬喰町四丁目の「御装束師 關岡」の印を捺す厚板（格子入段替雲紋模様 松坂屋美術館所蔵³³）や、37年（1904）5月、富山藩12代前田利聲（1835～1904）の遺品として娘の苞子（1869～1946 北三井家10代高棟妻³⁴）に渡った複数の能装束（三井記念美術館所蔵³⁵）である。これらについては、「斉広・斉泰期」の能装束とも異なる畳紙、あるいは保管状態にあるため、別途考察する必要があると考える。明治期の前田家と能楽との関係も考えていかねばならない。

また筆者の関心も、能装束の把握から、個別の能装束と演能の関わりに移っている。先の天保12年の唐織はその試論の一例だが、既に弘化2年に仕立てられた4点の能装束について、演能が行われた背景と用いられた曲の推定を行ったことに続き³⁶、仕立てた能装束の多い弘化4年、嘉永5年等について、斉泰との関わりを踏まえながら具体

的に考えていきたい。

藝大本の調査にあたっては芹生春菜氏のご協力を、写真掲載は東京藝術大学大学美術館のご許可を賜りました。育徳会本の写真掲載にあたっては、公益財団法人前田育徳会のご許可と、金沢大学のご協力を賜りました。鏡仙会ご所蔵能装束の調査については観世鏡之丞氏・清水寛二氏のご協力を賜りました。また石川県立美術館所蔵の能装束については掲載許可を得ています。なお、英文要旨はオルソン愛氏のご尽力によるものです。末筆ながらお礼申し上げます。本稿は平成27年度および28年度金沢大学プロジェクト経費の成果の一部です。

【注】

- 1) 東京藝術大学附属図書館所蔵 高屋徳次郎(肖哲)編『狩野芳崖傳』(1935)より。ただし、芳崖は翌年には体調を崩し、没している。(『展覧会図録『狩野芳崖 悲母観音への軌跡-東京藝術大学所蔵品を中心に-』芸大美術館ミュージアムショップ 2008)。なお高屋については、『高屋肖哲の新一括資料調査報告書-「雑事抄録」翻刻・画工類一覧および研究-』(金沢美術工芸大学美術工芸研究所 2000)に詳しい。
- 2) 2015年8月31日調査
- 3) 「東京藝術大学大学美術館収蔵品データベース」による。<http://www.geidai.ac.jp/museum/>
- 4) 切畑健「『翁』装束の基本思想-黒川能の蜀江・光狩衣を中心に-」(『古面』京都国立博物館 1982)、「井伊家秘伝の能・狂言装束」(『井伊家伝来能装束百姿』平凡社 1984)、齋藤望「幽玄の美」(『日本美術工芸』614 日本美術工芸社 1989)、正田夏子「野村美術館蔵・旧加賀藩前田家の能装束をめぐる」(『野村美術館紀要 第2号』野村文華財団 1993)、「能装束の意匠構成について-旧加賀藩の伝世品から-」(『鹿島美術財団研究報告(年報第10号別冊)』財団法人鹿島美術財団 1993)など。
- 5) その他もう1図あるが、文字の記載もなく装束の模様と確認できなかったため、含んでいない。

- 6) 東京美術学校創立(1889)前後、明治期の「日本美術」制度確立の過程については、佐藤道信『〈日本美術〉誕生－近代日本の「ことば」と戦略－』(講談社選書メチエ 1996)、高木博志「日本美術史の成立・試論－古代美術史の時代区分と成立」(『近代天皇制の文化史的研究』校倉書房 1997)、北澤憲昭『眼の神殿』(美術出版社 1989)、『明治国家と近代美術』(吉川弘文館 1999)、東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去 日本の美術史学100年』(平凡社 1999)、北澤・木下長宏・イザベル＝シャリエ・山梨俊夫編『美術史のゆくえ 美術史の現在 日本・近代・美術』(平凡社 1999)、『境界の美術史－「美術」形成史ノート－』(ブリュッケ 2000)などで述べられている。
- 7) 正田夏子「加賀・能登の能装束」(『加賀・能登の能楽』石川県 1997)
- 8) 密田良二・中村保雄・切畑 健『加賀宝生・佐野家伝来 能百選』(フジアート出版 1974)、『金沢能楽美術館図録』(金沢市・金沢能楽美術館 2006)に掲載。以下、金沢能楽美術館所蔵の能装束は、両書に詳しい。
- 9) 梶山 伸『前田家伝来衣裳』(講談社 1968)、展覧会図録『能楽－加賀宝生の世界－』(石川県立歴史博物館 2001)等に掲載。
- 10) 門脇幸恵「国立能楽堂保管加賀藩前田家伝来能装束の畳紙の紹介」(『国立能楽堂調査研究 vol.5』日本芸術文化振興会 2011)以下、国立能楽堂・高島屋史料館所蔵の能装束については、同稿に詳しい。
- 11) 注10に同じ
- 12) 絹は当時「ほら(洞)」「ほら織」と呼ばれた。(長崎 巖「新発見資料・ボストン美術館所蔵『獻英樓畫叢』に関する調査報告」『能楽研究』30号 法政大学能楽研究所 2006)
- 13) 野村美術館所蔵の能装束については、拙稿「畳紙墨書より探る加賀藩主の能、そして富山藩の場合について－野村美術館・彦根城博物館所蔵能装束より－」(『野村美術館紀要 第18号』野村文華財団 2009)、正田夏子氏による注4に詳しい。
- 14) 注9 梶山に掲載。
- 15) 『獻英樓』は、文政7年(1824)頃から天保3年(1832)頃にかけて描き集めたとされており、現在東京国立博物館本(13冊)、クレットマン本(4冊)、ボストン美術館本(1冊)の3本が確認されている。長崎 巖「東京国立博物館保管『獻英樓畫叢』について」(『MUSEUM』557 東京国立博物館 1998)、および注12。
- 16) 長崎氏によると、例えば、流派ごとに異なる模様の唐織を着用するとされる〈道成寺〉では、宝生流は「下がり藤」または「雪持椿」が用いられるとおり、『獻英樓』中の「紅地源氏雲雪持椿模様唐織」には、「寶生流太夫家形」と記されているという。(注12に同じ)
- 17) 法政大学能楽研究所主催シンポジウム「近世大名家の能道具が語るモノガタリ」(2016年3月6日法政大学)にて述べた。
- 18) 縹(はなだ)色がなまり、花色と呼ぶ。
- 19) 展覧会図録『松坂屋コレクション 能装束能面展』(日本芸術文化振興会 2011)、および2015年度石川県博物館協議会研究奨励事業として調査。拙稿「続・加賀藩前田家旧蔵の能装束の調査」(『石川県博物館協議会々報 第77号』石川県博物館協議会 2016)、同会総会(2016年5月10日 石川県立美術館)にて報告済。
- 20) 同模様の長絹は、観世鏡之丞家に伝わる能装束を保管する鏡仙会においても前田家旧蔵品として確認した(2016年7月25日調査)が、畳紙の番号は「四十五」であった。(松坂屋の畳紙は「四」)
- 21) 注13拙稿
- 22) 注5に同じ。ただし「東京藝術大学大学美術館収蔵品データベース」内の「形状」では、同図も1図として数えられている。
- 23) 注9 展覧会図録に掲載。また同年に仕立てられた能装束と演じられた能については、拙稿「加賀藩主前田齊泰の弘化2年御本復御祝能と能装束について」(『国立能楽堂調査研究 vol.9』(日本芸術文化振興会 2015)にて述べている。
- 24) 大正14年5月25日 前田侯爵邸、昭和11年6月29日 東京美術倶楽部
- 25) これまでの調査結果については、拙稿「前田家伝来能装束(前田育徳会・本館所蔵)の畳紙墨書について－齊広・齊泰の演能記録と照らし合わせながら－」(『石川県立美術館 紀要 第15号』石川県立美術館 2005)ほか、注13、注23にて述べている。
- 26) 注25
- 27) 「弥三郎」は宝生嘉内家4世明喬(宝生流14世英勝の実父)、「弥五郎」は宝生流15世宝生友子(弥五郎、のち紫雪 1799～1863)。
- 28) 侯爵前田家編集部 1929～43

- 29) 「御能 道成寺 江口 三山 柏崎 誓願寺 草紙洗 藤戸 阿漕 照君 夕顔 絃上早舞 以上天保五癸年 午二月 宝生大夫(花押)」(前田育徳会所蔵)
- 30) 石川県立美術館寄託
- 31) 前田育徳会展示室目録 No.11 (石川県立美術館 1985 以下同じ), No.23 (1986), No.49 (1988), No.130 (1996)
- 32) 注10, 19のほか, 展覧会図録『華麗なる能装束の美 高島屋コレクション展』(国立能楽堂 2007), 『国立能楽堂コレクション展 能の雅, 狂言の妙』(サントリー美術館ほか 2010), 田中淑江「博士学位論文 能装束小袖物の形状変遷に関する研究」(日本女子大学大学院 人間生活学専攻 2011) など。
- 33) 東京本郷の前田利嗣邸にて天覧能が行われたのが, 同年4月11日。4月19日には行啓能が催されている(倉田喜弘編著『明治の能楽(一)』日本芸術文化振興会 1994)。厚板は, 天覧能にて齊泰がシテを演じた〈張良〉で用いられたか。なおこれらの様子を描いた錦絵『前田家繁栄之図』(楊洲周延筆 版元北尾卯三郎 明治12年5月)では齊泰は〈安宅〉を演じているが, これは行啓能の演目である。こうしたことについては別稿に改めたい。
- 34) 『三井家文化人名録』(財団法人 三井文庫 2002)
- 35) 『三井家伝来の能装束展』(日本経済新聞社 2005), および2016年1月19日三井記念美術館にて調査。同調査も注19に同じ。
- 36) 注23拙稿に同じ。